

応 化 会 だ よ り

昭和44年 第8号

早稲田応用化学会発行

わが七十年の生涯を顧みて

山 本 研 一

(1) はじめに

東洋の儒教のご本尊である孔子の有名な言葉に「四十にして惑^{まど}わず、五十にして天命を知り、六十は略して、七十にもなれば勝手なことをしても道はずれない」というのがある。この言葉に対し、私のような極めて平凡な人間はいくつになっても迷いばなし、後悔のしづばなしで、まことに情なく恥しい。しかしこの言葉と対照的な言葉がある。それは欧米の精神界を今も支配しているキリスト教を世に出したセント——^{ひじり}聖といわれる程、高德の——聖ポーロの言葉に「自分ほど罪深い者はない」という意味の「われは罪人の頭なり」という反省の言葉がある。東と西を代表する二大思潮の人世観の相違をよく示している。しかし私にはポーロの言葉の方に、人間味と真実性があると、つまらない自分の一生を顧みて、僅かに慰められている。

さてこの頃は大学の定年退職教授に学校からご意気か、お情けかわからないが、最終講義という名目で、この人生劇場から退場するためのささやかな花道を作って下さっている。大学の最終講義というと、人によっては、今迄の研究業績を詳しく紹介する方々も多いようである。しかし私の場合は誇るに足るような研究成果もないし、あったとしても工学関係の仕事は進歩、発達が激しく、数年もすると皆時代遅れとなってしまう。またあまり詳しいことを申し上げても、専門分野の違う方々にはご迷惑とも考えて、私の研究のことは後にごく概要をそれも裏話的に申し上げる。

というのは人生の終着駅にきてしまった私として、一生を振り返ってみると、自分のささやかな研究よりも、自分にはもっと本質的と思われる過去の人生の諸問題やその哀歎の方に心ひかれるからである。その意味で、後の話と関係のある昔のいくつかの思い出を申

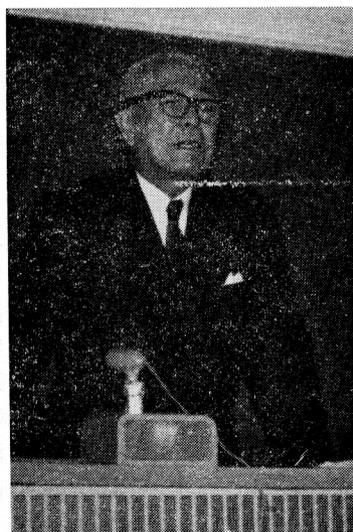
上げてみたい。

もう一つは大学問題である。私は学生時代を入れて母校、早稲田大学に52年もお世話になり、一生涯を大学に賭けてきた訳である。私にとって心のささえとなってきた、このアイドルである大学が今、史上最大の批判の嵐に^{ほんろう}翻弄されている。とても黙ってははいられない。最後の機会でもあるので、かねて考えていることを卒直に申し上げて、さっぱりしたい気持もあるので、最後の所で勝手な熱をあげることをお許し願いたい。そして私の話の中に何か少しでもご参考になることがあれば幸いである。

(2) 少・青年時代の思い出

私の少年時代は明治の末から大正の初期で儒教を基調とした教育勸語を学校教育の基準として徹底的な国家主義、軍国主義的教育をうけた。

物心づいて初めての思い出は日露戦争に出征する兵士を駅に旗の波で見送った思い出であり、少年時代に憶えた歌はほとんど軍歌で、体操は軍事教練、遊戯は



最終講義の山本先生

戦争ごっこという有様であった。情緒豊かな童謡や歌謡曲が歌われたしたのは、大正にはいつからであり、旧制中学5ヵ年間の修身の時間には必ず教育勅語を暗唱させられ、忠孝、特に忠義一本やりの教育をうけた。

私の父はその当時の通信省、今の郵政省の建築官吏で、家には漢語の書籍も沢山あったが、近年の青年が現状に満足せず、進歩を求めた何か新しい近代思潮に魅力を感じるように、恐らく儒教に満足せず、キリスト教にひかれたのであろう。死ぬ迄キリスト教を研究すると称して、新教の各派を遍歴し、私達、子供3人は幼時からキリスト教的家庭教育をうけ、各派の洗礼を何回もうけ直された。しかし青年に達して信仰は批判に代り、終に教会通いを止めてしまった。そのお蔭で新教、各派の教義や欠点をいやという程知らされて、宗教批判者に転落してしまった。しかし宗教としてよりも、道義としてのキリスト教は最高であり、今もバイブルの言葉には心惹かれるものが沢山ある。

もう1つの思い出は小学6年の折、父の出張について那覇に1ヵ年行ったことである。同級生は沖縄人で日本語で教育されていたが、向うの言葉は解らず、放課後は毎日新設の小さな図書館に入りびたりになって、そこにあった数百冊もの少年用の世界名作物語りの蔵書のすべてを感激しながら悉く読了して、読書の魅力ということを知った。その後も一生涯、真理を探究する科学と共に人間の真実を求める文学に心惹かれる端緒となったのは、この少年時代の体験によるものかとも考えている。

旧制中学は5年制であったが、2年位までは長男で我儘に育てられたせい、非常に偏食でそのためか、身体も貧弱で小さく、いつもクラスの最前列に並ばされた。しかし3年の生理衛生の学課目で、1年間栄養の話徹底的に吹込まれて、やっと正常なカロリー食に戻り、また鉄棒などの運動も面白くなり、その後の2ヵ年間で15センチも身長が伸び、漸く人並となり、体力にも自信がついた。中学時代のもう一つの思い出は学課目のうち化学の先生が地味な教え方だが、毎時間、復習、演習、実験を上手に熱心に指導して下さったお蔭で、化学が大好きになったことである。このおふたりの先生にお会いできなかったら、私の生涯はいまとは違った方向へ行っていたかも知れない。やはり教育も人次第という感銘をうけたことである。

早稲田大学に入学したのは丁度、理工科に応用化学科が設立され、歩いて通える所にあり、官立高校はその頃、九月の入学期でもあったので、試しに受験して

みたら受ってしまったのでその儘続けることになってしまった。

当時の私大は予科2年、本科3年の学年制で理工科の予科は各科共通で、広い工学の基礎科目が主であった。そしてひどい話だが進級に際しては、今の入試の発表風景さながらに進級者全員の平均点をコンマ以下2桁まで張り出した。及落はもとより、誰れが何点で何番だからすぐ判ってしまう。私の予科1年前期の時代に、ある事情でいくつかの学科目に赤字を貰ったことがある。点の勘定をしてみると、後期に満点近い点を取らないと及第できそうにない。小心の私はこれは大変なことになったと、それからは、また学校の図書館に入り浸りになって、その後たった2ヵ年間ではあったが、毎日10時間以上も勉強した。わが一生の内では一番よく、本当に勉強した。そして自信もついてきた。あの勢いでずっと続けていけば大した仕事ができたものを、そこは凡夫の情けなさ、少し状況が良くなると、すぐまたもとの至阿弥に戻ってしまった。

在学の予科時代に第1次世界大戦が終り、ウィルソン米大統領の民族自決宣言や帝政ロシア革命などの影響で、政治的にもデモクラシーからマルキシズムまで西欧の近代社会思潮が一時にわが国に押し寄せてきた。私達のクラスも当時、安部磯雄先生から社会学でデモクラシーについて先生独自の講義を興味深く拝聴した。後に普通選挙も行なわれ、本当の政党政治が始まった。僅かの期間ではあったが、割合に自由な、後に大正デモクラシーと呼ばれて懐かしがられた時代であった。歴史は繰り返すというが、戦後の現在のこの良い時代が大正デモクラシーのようなことを、また繰り返さねばよいがと、この頃の大学紛争を見ていると憂慮される。

(3) 狂乱怒濤の時代

昭和に入って、政党同士が露骨な政権獲得競争に狂奔するあまり、いろいろな問題を引き起して、国民の信を失い、また軍備縮小に対する軍部の不満や農村の深刻な不景気などの不平不満が集積し、これが右翼の国家主義者の利用する所となって、わが国の政治は右へ右へと旋回してしまった。そして5・15事件や2・26事件を起し、さらに満洲事変、支那事変へと急坂を滑り降りるような勢いで、ついに太平洋戦争へと止るところなく拡大していった。その十数年間はわが国にとり、真に痛恨極まりない不幸な狂乱怒濤の時代であった。

この狂気の時代の忘れることのできない2～3のエピソードをお話してみたい。その1つは5・15事件

で当時の極右国家主義者に煽動された青年将校が犬養首相らを“問答無用”と射殺した事件である。当時、校友の斉藤隆夫衆議院議員が議会で政治への軍人の関与を痛列に糾弾した演説は、真に素晴らしい大演説で、各新聞紙、全面に報道され、全国民の血を沸したことを記憶している。当時、わが国には強力な指導者の明治の元勳、既に無く、2代目の政治家や将軍連には青年将校を説得するだけの気魄無く、結局、わが国はこの事件以後、軍部にじり押しに押されて、戦争への道を直進してしまった。

敵の虚を突いた太平洋戦での緒戦の勝利も僅かの期間であった。計算すればすぐわかる、日米の総合戦力の極端な違いは、戦線の拡大と共に徐々に現われてきて、戦局は次第に悲運に向い、終に徴兵猶余で勉学中の大学生にまで学徒出陣の命令が下った。

わが学園でも理工系以外の法文系の全学徒は現在の安部球場に集められ、当時の田中穂積総長より（謡曲、敦盛にある）「人生僅か50年……」の信長、出陣を歌った、田中総長一代の凄絶悲愴な告別の辞があった。この告別の辞と安部球場を埋めつくした出陣学生の姿は今も脳裏に焼付いている。

これを、わが国の歴史で20何年も戦争のない、戦後の自由な御時世の中で甘やかされている現在の大学生の恵まれた環境や生活と比較してみると、少しの違いで、さきに生まれた不幸な彼等のことが忘れられない。

学徒出陣後の戦局はいよいよ破局に向って雪崩のように急転、落下し、帝都を初め国中のほとんど全部の都市や生産施設は悉く、空襲破壊されて、一望の焼野原となってしまった。母校も昭和20年5月25日夜の大空襲でコンクリート・ビルを残して、ほとんど大半灰燼に帰してしまった。

その秋には理工系のわが学園、最後の在生も敵の本土上陸決戦に備えるため、軍の派遣将校より「いよいよ最後の覚悟を……」と事前に私には申し渡されていた。我々教師も学生と共に相模灘か鹿島灘の海岸に壘壕掘りに出発する覚悟をしていた。こうなると講義や実験にやかましいことをいっても始まらない。もうすぐ、若くして死なねばならない彼等を前にしては何ともいえない憐憫の情がおきてきて教師と学生などという区別も消えうせ、同土的一体感が自然に湧き起ってきたことが思い出される。

幸に原子爆弾と天皇のご裁断でわれわれ、皆、九死に一生を得たが、沖繩でさえあのように玉砕した際なので、無条件降伏などとは到底考えられもしなかつ

た。

(4) 私の研究の裏話

さて以上のような社会的背景のうちにあつて、大正12年に母校を卒業することになった私は、幸に小林先生の下に卒業論文から引続いて研究生活にはいれることになった。小林先生にはその後、10数年間も師事して、いろいろの教えを受けた。

先生はもとより“研究第一”の立前をとられたが、また国家、社会に尽すことが人間として最高の義務だという信念を貫ぬかれた。また応用化学という専門は化学という基礎学問を応用する分野であるから、研究成果もそれだけに終らせず、それを応用する——これは母校の教旨の一つに学問の活用というのがあるが——この活用を念願として工業化まで進まれることを本懐とし、実際に先生の研究成果を御自分で何度も実施に移された。

学生の郷里は越後でその関係もあり、郷土の物産の応用ということから石油と酸性白土などの研究に終始された。ことに酸性白土は地質と風土の関係で新潟県の蒲原郡各地に産出したので、その地名から初め鉱物学者により、蒲原粘土と命名された。しかしその後、全国各地からも産出し、指示薬に酸性を呈することから、先生は酸性白土と命名され、酸性の説明に電気二重層説を導入された。酸性白土の名称は後に各学会でも一般に採用された。

一方、これより以前に土壤の酸性の研究は農学方面の重要問題で、土壤学の分野では前世紀末から土壤の酸性の原因の解明には世界的にも学界で討議されてきた。わが国でも京大、農科の大工原博士と九大、農科の大杉博士の論争が有名で、前者は塩基置換説、後者は自己酸性説という学説でそれぞれの実験的根拠をあげ、学会誌で論争されてなかなか興味深いものがあった。

酸性白土の酸性についてもその当時、理研の礎部博士の酸性塩吸着説や池田菊苗博士の門下の岡沢博士の複分解説——塩基交換説の一種——や亀山博士の独自の自己酸性説その他が引続いて発表されたが、いずれも実証不足で水かけ論に終った。私も白土の酸性に関し実験し、いろいろの事実を報告したが、今その詳しいことは省略する。今から考えると40年も前の話で、未だブレンステット酸やルイス酸などの酸、塩基の新しい概念も不明の時代で随分無理な実験や独善的な仮説を押し立てて、相手を“へこました”積りでいた滑稽さが反省される。応用化学という分野の学問はやはり基礎化学の新しい学説に絶えず注意しておくことが

重要であると痛感される。

その当時の第1次大戦の勝敗は液体燃料、特にガソリンの多寡で決したといわれていた位であるから大戦後も世界各国の石油資源の獲得競争や他の資源からの石油の生産競争は凄じばかりであった。丁度、その時期に小林先生は魚油に酸性白土を添加乾留して、天産石油に近い、先生の命名による、いわゆる人造石油の製造を発表し、当時の世間の視聴を集められた。私も先生の勧めで卒論に、当時、満洲に資源的に豊富な大豆油より人造石油の製造研究を行ない、軽質油分の化学成分の決定に半年間、毎日、元素分析を繰り返して、この技術の難かしさを体験した。結果は鎖状のパラフィン系炭化水素が主体であることがわかり、また触媒を酸性白土以外に探求して、吸着力の高い活性炭がもっと有効なことも知った。詳細は母校の応用化学会報第1号、1頁に掲載した。初めての実験報告なので、その印象は今も忘れ難い。

その後、人造石油製造法としては独逸で有名なフィッシャー法の基礎研究が発表された。しかし触媒その他の詳しい事は秘密にされていたので、英、米の国立研究所で相次いで追試して、実験報告を夫々の国の工化誌に発表した。私は当時この研究こそ石油資源に恵まれないわが国にとり最も重要なテーマだと考えたが、小林先生は酸性白土が使われないためか、余り積極的ではなかった。免に角、わが国で一番早くフィッシャー法の基礎研究を行ない2~3cc程の水の上に浮んだ人造石油の見本を携え、当時の工業化学会で先生が講演された。当時ソ連よりナフテン系の安いガソリンが輸入された時代で、雀の涙程の値段の高いガソリンが何になるかと、石油会社の人達からは反感、嘲笑された。私は引続いて石川教授に実験してもらい、学会への報告も2~3報提出したが、小林先生も嫌気がさして、消極的なので中止してしまい、それ以後は酸性白土の研究に本格的に取り組んだ。

当時京都大学の喜多研究室では、児玉信次郎博士らがまだ学生時代で研究を始められ、その後も引続いて第2次大戦末期まで基礎研究を続けられた。そして数十報の報告を工化誌に発表され、また欧文の単行本にも纏めて出版され、世界のこの分野で立派な基礎研究の業績を残された。工学の研究は応用研究といえども、早急な成果を期待せず、余り目先だけのことに捉れていては大成しないという良い教訓を体験した。

それ以来、酸性白土の基礎研究を戦争が烈しくなる頃まで数十年もコツコツと続けた。昭和の初めには粉末固体のX線分析法、限外顕微鏡、水素イオン濃度の

電圧測定法などの新しい分析法が相次いで紹介され、それらの機器も当時の私立大学の貧弱な学校予算では買入れ不可能であったが、文部省の研究奨励費や財団、その他いろいろの所から研究費を都合し、購入して戴いた。

それまで小林説では酸性白土の吸着能の大きいのはその本体の珪酸アルミニウムが全部非結晶のコロイド質であって、表面積が非常に広いためと考えたが、実験的証明を欠いていた。私は幼稚なX線分析装置を手製して、2ヵ年ばかり毎日、暗室にとじこもり、鉛の腹掛けをかけて各地産、数十種の酸性白土、外国産のフラスアースや成因上の関連岩石などについて、広く研究を行なった。また偏光顕微鏡による鉱物学的研究も大坪教授にしてもらった。その結果は酸性の有無、吸着能の大小に関せず、全て合一の結晶系であることが確認された。また各濃度の酸、アルカリ溶液に対する溶解度の定量からいわゆる可溶性珪酸量を測定する根気のいる地味な研究を行なった。このうち数十種の代表的酸性白土の完全分析は石川教授の協力をうけた。

これらの地道な正攻法の結果から可溶性珪酸の多い白土程、吸着能が大であることなどいろいろの事実を確認した。そしてこれらの結果から活性化の理論を推定して、活性白土の製造にまで発展することが出来た。活性白土はわれわれがつけた名称であるが、その際塩酸、硫酸による活性化の基礎実験は学生時代の卒論として大坪教授に、また活性化の基準は石川教授にまとめて貰って、特許もいくつか獲得した。

その時代に活性白土製造の報告や特許は世界で数十件も提出されていたが、われわれの見出した活性化の条件は平凡だが、実用的という点では最も優れた方法だと今も考えている。この活性化の条件でどんな粘土や土壌でも天産優秀酸性白土以上に活性化された。そして天産酸性白土業者からの要請で小林先生を正面に立て、わが国で初めて設立された活性白土の製造会社の技術顧問ということで工業化に乗り出した。そして若気の至りで、工場技術、管理機構や経済的問題などで、精力を浪費し、最後には後から設立した活性白土会社との間で、活性化の特許係争問題に巻きこまれて、詰らない誤解を受けたりした。この私の関係した会社は今の日本活性白土株式会社で、30数年経過したが、活性化の基本的条件はそんなに変わっていないと思う。

こうして天産白土製品は殆んど活性白土に代り、現在でも油脂や石油類、その他の吸着精製用に大量に使

用されている。活性白土に続いて研究したのは合成シリカ、アルミナ系触媒で、これが実用化されるまで活性白土は接触分解、その他に触媒としても多量に使用された。殊に戦時中は接触分解がソリンの製造や合成潤滑油製造の副原料として^{たつみ}巽工業、朝鮮活性白土会社を初めとして各地にわれわれの方法で活性白土工場の建設が始まった。しかしこれらは敗戦でおしまいとなってしまった。

これ以上の詳しい話は時間の関係で省略するが、これらの研究で得た私の体験は、実験的研究では、間違いない確実な新しい実験結果、実験の事実こそが最も重要であるということである。その解明や仮説を立てるには余程、違った方法、方面で十分に実験しないと危険であるということである。

戦中から戦後にかけては、応用化学科から別れた石油工学科が設立された関係で責任上、活性白土などの無機関係の仕事は割愛せざるを得なくなった。また石油の研究を本職とするためには、今までと異り、石油科学やその基礎となる有機化学や合成化学、触媒化学など今までと違う多方面の基礎化学が必要となり、研究もその後は石油関係の分野に移ってしまった。また名は体を現わすというが、研究を一本にしぼらないと力が分散するような気がし、2足の“わらじ”のはけない私の性格として、それ以後白土関係の研究は無機関係の大坪、加藤両教授の研究室にお^{まか}寄せした。

しかし今から考えると、これは誤りで、学問研究は深くきわめる程、その各分野は本質的に連続性があるものである。一つの研究分野だけの学術に頼っていたのでは直ぐ壁にぶつかってしまう。厄介で骨が折れる事だが、出来るだけ広く各分野の学問を利用して総合的に研究しなければ、これからの研究はすぐに行きづまってしまうと思う。またその時代の最も新しい学説を消化応用し、出来るだけ、その時代の新しい最新機器を“おっくう”がらず、利用することも大切である。ほかの研究者が使わないうちに早く有効な分析機器などを旨く利用するだけでも人の真似の出来ない成果をあげることがしばしばある。そういう新しい器具や新しい学説を活用するのは若いファイトのある研究者の特権で、そこへいくと人にもよるが、歳をとると昔の古い概念や折角、熟練したのだからと古い方法をなかなか清算できないことを痛感する。

つぎに戦後の私の研究のことであるが、石油関係のいろいろの研究をしている間に、石炭から石油へのいわゆるエネルギー革命が押しよせてきた。そして東京瓦斯の友人、中沢常務の要請もあり、昭和27年以降、

石油の接触ガス化による都市ガスや合成ガスの製造の基礎研究に先鞭をつけて、これを私と森田研究室の研究主題としてきた。これについては御存知の方も多いと思うので省略する。(別冊、石油のガス化 総説40頁)戦後の技術革新のうち、燃料工業界や化学工業界に起った技術革新は石炭より石油への燃料革命と石油化学工業の勃興であろう。このうち現在の石油化学工業は石油の非接触式の熱分解法でエチレンなどのオレフィンを造り、これを出発原料としている。私達の石油改質法はこれに対し、石油を水蒸気、酸素(空気)から現在、炭酸ガス、水素までを改質剤として反応させて、接触式に改質して都市ガスや合成ガス、水素まで進めるのが特徴である。なおこの石油ガス化研究は“くしくも”戦前、われわれが行なったフィッシャー法の逆反応に相当し、戦前と価値観が逆転し、今は石油が原料として一番安くなって、これから凡ゆるものができることになった。ここにも純正化学と応用化学の違いが、でていて面白い。以後十数年間、石油系流体燃料の接触改質の基礎研究に研究人員、百数十名(これは主として卒論従事者)、消費した研究費も数百万円に及んだ。最近では森田教授が引継いで中心となって研究されている。

(5) 母校の再建と大学制度の大改革

戦争の末期に年老いた両親を疎開させ、本土上陸決戦と祖国の玉砕を覚悟していた際に、終戦を迎えた。見るかげもなくボロボロになったわが家も、どうやら戦災を免がれた。それにまだ40台の血気盛んな壮年時代でもあったので、敗戦で一般が虚脱状態となり、戦後の大混乱の中でも母校の再建という大仕事が残っていたので割合に張り切って復旧の仕事に取り組むことができた。そしてわれわれの手でまづ母校の校規を他大学に率先して、いち早く民主的に大幅に改正した。しかもこの困難な時期に先輩の大先生達をさしおいて、突然教授会で理工学部長に公選された。理工学部の部長選挙については今迄、いろいろの“いきさつ”もあり、固く辞退して、自分の研究に進むのが本当だと理性は強く命じたが、母校の荒廃した^{ひきよう}焼跡に立ってはその様な卑怯なことはできない。その時は最後のご奉公の積りで、寝台を部長室に持ち込んで、以来3年間、昼飯の時間も、人との会談に利用しながら、学部の教育と研究の再建の仕事に打ち込んだ。この不衛生な生活のおかげで、数年で髪が抜け、同時に白髪となるという“つまらない”体験までしてしまった。

理工学部の復興という大仕事は主任会という執行部だけではとてもできないと考えた。学部全員の協力を

得るため、いろいろの委員会を作って立案して貰い、毎日のように会議を重ね、また教授会を開いてその支持を得て、仕事を進めていった。主任会や委員会のおやつに、一貫匁30円の薩摩薯を“ふかして”出して喜ばれたのも忘れられない。また学部長会や理事会で十何時間も続いた小田原会議に、コッペパン1個と水で過したことも度々あった。貰ったアルコールを水で30%に薄め、砂糖を焦して褐色にした怪しげなウィスキーを造って、学部長懇親会に出して大喝采された思出も忘れられない。

それから20年もたった今、冷静に考えると、やはり部長、理事などという教育行政上の仕事はその道の専門家か、先輩の経験者に任すべきであると考え。民主主義はたしかに、すぐれた最高の理念だが、それを成功させるには同時に個人の良識の高いことが前提だ。そうでないと何でも選挙のこの方法は、盲、千人の愚かしさに終わってしまう恐れがある。私は若く研究心の旺盛な間は、決してその教授を雑用の多い管理職などにつけるべきではないと確信している。

さて一方、戦後の衣食も足りない貧窮の最中に占領軍の要請で、わが国の教育制度の全面的改革が強行された。そして6・3・3・4制の頂点としての新制大学制度も法制化された。わが学園でも長い衆議の結果、旧来の付属学校を昇格の形として、ほぼ現行の新制大学制度を発足させた。

新制大学の性格と理念は旧制大学が国家に奉仕することを窮極の目的として、人間性を無視して、余りに専門的、職業的な教育を強制した結果、自主性、批判力の精神を欠いた人間を造り、戦争に盲従させたとして、その旧制度の教育の改革のため、人間育成という旗印で一般教育という太い柱を建てたことである。以来二十年、経過した現在その理念には間違いないとしても実施の方法、手段に適切さを欠き、高等学校以下の教育は前よりも一層烈しい大学への準備学校になりさがり、学生の不満も高まり、多くの欠点を暴露して現在一般教育は批判の中に立たされている。今これを十分論議する時間はないが、私見として次のように考えている。(1) わが国の社会が依然として実力よりは学校教育を偏重し、学閥、派閥的特権意識がなかなか解消されないという、わが国の特殊事情、(2) 新制の大学院制度との関連を、実施した当時の経済的事情から充分検討されなかったこと、(3) 予想外の大学進学者の激増や、(4) 出発時の事情もあって、一般教養課程の人事で、米国の大学におけるように、専門課程で完成された老練な教授を一般教育課程に配置し得

なかったこと。これらが所期の目的になかなか到達し得ない原因と考えられる。しかし一般教育の目的の達成は新制大学発足の折、私も責任者の一人として要請したように、10年や20年はおろか恐らく半世紀、一世紀を経て、漸く実を結ぶ程の大事業であり、一般教育の成果は学生が卒業後20年～30年後に必要なようになってくるものである。教育事業は急がず長い目でみることが肝要であると、今も考えている。

かくてわが学園も当時の島田孝一総長の下に教育制度の大改革を行ない、続いて大学院制度も実施された。私が第2次島田総長の理事会に加っていた当時は母校の将来の姿としてつぎのような見解をとっていた。「母校の教育・研究体制は米国一流私大に範をとり、将来は大学院を中心とした大学とすることを最終目標として、学部の方は余り大きくしないようにする。学部学生のマスプロは米国で州立大学が担当しているようにわが国では国、公立大学が引きうけるのが当然の責任である。大学は学生数の多いのが決して自慢にはならない。早慶両大学のような伝統ある大学はその特徴ある自由の校風を發揮し、質で世に問うべきである。」さらにその当時の学部長会などにおいても「理工学部は母校の看板でもあり、法文系の各学部も総合大学の理念に反するような各学部の独立採算制などは主張しないから、真に質の良い学生を出してもらいたい。法文系学部の経済で手に負えない程膨張させないでくれ。」といわれた程で島田総長の在任期間中はこの最高方針を貫いてきた。

なおこの理事会でわが国で初めて、母校復興のための“施設拡充費”なるもの(当時3千円)を世論の反対を覚悟して実施に移した。幸に社会の支持を得て、その後の母校の再建はこれに負う所大であった。

しかしその後、経済の高度成長、産業の大発展に伴う企業からの要請などで、以上と全く逆の方向へ母校が向わざるを得なくなり、数年前にはあのような大学紛争も体験することになってしまった。私は今も母校は早く大学院制度を整備して、大学院においてかつての理想を実現して欲しいと願っている。

(6) 期待される大学像と大学問題

私は早稲田大学に半世紀もお世話になったが、初めのうちは早稲田という所は、良くいえばなんと自由奔放な所か、悪くいえば“だらしない”位放任主義で義務や責任に対してルーズな所かと非常に不満に思った。しかし数十年もいていろいろの歴史的事件の洗礼をうけて大学内のこの自由なふん囲気の真価と有難さが漸くわかってきた。

随分、昔の話になるが、米国の財団か個人か、忘れてたが、早稲田大学へ何かキリスト教の講座をおくことを条件に、相当の寄付を申し出で、断わられたことが新聞誌上に報ぜられた。私の父はキリスト教徒だったので、当時の大隈総長の独断なことを残念がり、中学生の私もその辞退した真意が理解できなかった。しかし後になって大学は特定の宗教の色眼鏡をかけられてはそれだけ学問の自由は狭められるだけだと、漸くその処置の正しさがわかった。

大体、教育は教養育てるという位であるから、学校教育はいろいろの方面からすぐ利用される本質的な弱さをもっている。国家、宗教、イデオロギーなどからも、すぐに利用される。戦前のわが国は明治維新以後、和魂洋才といい、物質文明だけを欧米から取り入れて国家の精神面は旧来の儒教を主軸とした日本精神なるものであった。従ってその理念から大学は国家にかしづく侍女にすぎなかったと批判されてきた。

しかし国体も変り、主権在民の民主主義を最高の政治理念とする新憲法の時代になって漸く、教育もその本来の意義をとり戻した。殊に大学は近年の世界的な紛争以来、旧来の古典的な独逸フンボルト式の旧い大学の理念から改革、蟬脱することが強く要請せられてきている。すなわち大学は学問を教え、学問を創造する教育、研究という今までの2大使命の外に、社会や広く人類全般に奉仕するという崇高な使命を強く求められてきたのである。したがって理想像としての現代の大学は一国家や一族を超越する永遠の存在であって欲しい。そのためには大学は宗教や国家権力、金権、左右のイデオロギーなど、凡ゆる権力から容喙支配されずに、完全に自由でなければならぬと私は確信している。勿論いろいろの型の大学があってもよい。しかし理想の大学の職に携わるものとしてはいずれの宗教や思想にも片寄らない方が良く考えてきた。

私は余り長い間、科学を専門としたので、分析や批判精神ばかり強くなり、宗教やイデオロギーに深入りできず、それで校歌にもあるように大学こそわが心のふるさとであり、理想像であると考えてきた。

この私の心の支えである大学が昨今のご承知のような有様である。たしかに大学は戦後、新制大学となって古い理念は一応は払拭された筈である。しかしなお沢山の古い教や改革すべき問題を抱えている。これらは長期に亘って民主的方法で、漸次改革していかねばならないことは論を待たない。

現在わが国の各所に起っている大学紛争はその原因

として共通するものもあるが、また各大学に内在する特殊事情により、それぞれ相違する原因もある。私は今、これについて論議するつもりはない。唯、我慢のならないことは、最近の大学紛争がいつも一部の狂言的革命家気取のゲバルト学生により悪用されていることである。すなわち大学の自治を逆用され、大学を治外法権の場所に悪用され、大学を砦とし、大学紛争を一つの手段として利用し、また大学の改善、改革などの名目で一般学生を引っぱり、彼らの真の目的の現体制の破壊などに悪用しようとする事実である。戦前の国家権力と反対に現在の大学の自治は外部の極左の圧力の下に、自治が内部から崩壊されようとしていることを、われわれはよくよく見極める必要がある。彼等、活動学生なるものは宗教各派の抗争と同じくそれぞれの独善的主義主張に踊らされている。そして社会最高の知的エリートを自負する彼等が多数決のデモクラシーのルールさえ無視して、いよいよ細分化された派閥に分裂し、自らの主張を通すためには暴力を当然として学生仲間同士でさて深刻な主導権獲得競争に狂奔している。まさに5・15事件前後の青年将校に匹敵する所の極左思想に被毒された奇形の姿である。

今まで世界の歴史が教えるように暴力による革命で真の納得し、安定した社会は決して成立できない。少数の暴力で断えず恐怖政治を敷く以外に、多数を支配することはできない。それは独裁政治の致命的な欠陥である。

一度、暴力が罷り通れば道理は退却し、いよいよ暴力が奮い易くなり、それは丁度右と左の違いはあるが、昭和初期の時代に、日本滅亡へと導く導火線となった5・15、2・26事件で、“問答無用”と上官を射殺したのと同様の無法、無知の所業である。今日のゲバ学生はふたこと目には“ナンセンス”という言葉を使うがこれは昔の暴力将校の“問答無用”と同じ発想法で、独裁、驕慢、極まれる態度である。

如何に理屈づけようと学生は両親の庇護の下に、大学で将来、いよいよ競争が苛烈となる社会に出ていくため、準備中、修業中の身分である。権利ばかり欲張らずに、義務や責任を尽すべきである。甘い親に育てられた“ドラ”息子が、後に一生、不幸であるように新しい方法、手段で敵しくしつけられることが結局は学生のこれから先の一生のためだと、明治生れの私は確信する。

さらに最高の知性と理性の府である大学がこんな事態になったのは、結局、戦後の道義教育に根本的な欠陥があったのではないかと反省される。

私は戦後、欧米9ヵ国に外遊した折に、ついでながら、キリスト教が各国の社会に対する影響力に、かねてから興味をもっていたので、注意して見聞してきた。そしてわが国の主な宗教の仏教が、一部の新興仏教を除いて、葬式宗教となってしまうのに反し、欧米ではキリスト教が未だに相当強力な影響力を社会全般にも、また各家庭にも及ぼしており、学校教育や学庭教育の道義的基盤はキリスト教道徳から形成されていることを確認した。なお共産国家は戦前のわが国以上の鉄の輪で道義も思想も締め固めているのはご承知の通りである。

わが国の模範的国民、今の言葉で期待される人間像は戦前には儒教を背景とする教育勅語に具現されていた。その可否は別として、戦後これに代る何等の道義的基準なく、家庭でも両親は是非善悪のけじめをつけ得ず、“しつけ”の尺度をも失った。経済の高度成長や物質的文化の発展には宗教やイデオロギーで固められない方が良くも知れない。しかし欧米社会に対してもまた共産国家に対してすら、善悪は別として、道義の寄り所となる基盤さえ、未だに作られていないことが、わが国、社会はもとより学校教育や家庭教育にとって最大の弱点ではなからうかと考えている。現在の学生騒動で、一般学生の力弱さの根源もこの辺にありそうだと考えられる。

永年教育と研究に携ってきた私は古い言葉かも知れないが、自分の職業を聖職と信じるプライドを持ってきた。それでこそ一生貧乏して報われる所の少い環境で満足してこれ、また将来立派に成長し、立派な仕事を完成する後続の子弟を迎えみる楽しみがあるからだ。

教育は敬愛を基本としなければ成り立たない。私は決して儒教で教える。“三尺下って師の影を踏まず”などという時代錯誤で封建的な師弟の関係をいうのではない。いくら民主化された社会で教師も学生も同じ人間的レベルにあるとしても、そこに礼儀というものが少なくとも潤滑油の役目をしてもらいたい。礼儀が人間関係を円滑にする潤滑油であるように、敬愛は少くも師弟間の潤滑油であり、親和力でもある。物を貰った人には感謝するが、物以上に大事なことを教えてもらう先輩の教師を“お前”呼ばわりし、学長、学部長、教授の罷免権を本気で、彼等のいう“勝ち取ろう”などという精神の持主は奇形、狂気の沙汰の限りで、もはやいべき言葉もない。今後優秀な人材は嫌気がさして大学を去っていき、大学は精神の面でも荒廃するだろう。まさに大学は興亡の岐路に立たされて

いるといえる。ここで毅然たる態度をとらず大学問問の処理を学生に迎合し、安易な妥協をしたりして大学体制をねじ曲げてしまつては大学の滅亡である。すべからく百年の大計を立てる積りで、じっくりと対処すべきと考える。

重ねて強調したいことは教育も研究も師弟の間に敬愛という潤滑油を欠いては円滑に進行、発展しない。私は新制大学発足の折、大学の中心は教師と学生であるから、旧来の封建的師弟観に代わる新しい師弟像を文学部の戸川教授（現在文学部長）をお願いして20年前に作って戴いた。それを額にして掲げて、師に対する慢心を戒めている。それをここに紹介する。

科学者の新しい師弟観

われわれは師と共に弟子に共に常に真理を愛し、真理を求め、真理の前に講虚でなければならぬ。

われわれの独創は先行者の業績に芽ばえ、後続者の業績に実を結ぶ。

われわれは師の業績を母胎とし、土壌とし、足台として、これを超克して進まねばならぬ。これがすなわち独創である。

われわれは弟子によって完成せられ、否定せられ、そしてより高いものに綜合される。これがすなわち発展である。

ここに師弟の敬と愛とが生まれる。師を敬い弟子を愛するのは真理を敬い、真理を愛するが故にはかならない。

(7) おわりに

おわりに、もう一度私の一生を振り返ってみると、2度に亘る世界大戦があり、わが国は10年毎に戦争に参加し、最後には泥沼の悲惨な10年戦争から、終には無条件降伏、戦後の大混乱、インフレという肇国以来の苛烈極まる狂気の時代を経験した。しかしよくよく考えるとこの苦難と犠牲があったればこそ、初めて現在の自由があり余る程の民主国家ができあがり、国民が納得し、国民の総力が発揮できる体制が完成されたのである。わが国民が敗戦で全ての植民地を失い、しかも天然資源に乏しく、ありあまるのは人口だけという最低線にまで転落したればこそ、生存のために起死回生の努力をし、また勤勉で進歩的な国民性といろいろの幸運がわが国を現在、自由世界の2位、3位といわれるまでに奇蹟的な復興と繁栄とを築いたのである。わが優秀な民族のこの特性から考えると、さらに前途は洋々たるものがあると期待できるのである。

しかし戦後派の若者のうちには昭和元禄などと浮かれ廻る風潮もみられる。世界の国際的経済競争、生存競争はいよいよ厳しくなることが予測される。貿易、資本が自由化され、わが国産品が国際的競争場裡にその優劣を競うことになった現在、わが国の前途はなお容易でないことを覚悟しておく必要がある。

この国際競争に落伍しないためには、この宇宙時代の今日、資源の乏しいわが国としては結局、科学と科学技術を画期的に進歩発展させ、産業、特に工業を盛んにするより外に繁栄の道はない。新しい科学と科学技術こそ新資源、新産業を生み出す母胎であり、土壌である。そしてそれは結局、人間の頭脳から生れるものである。この意味で日本の将来の命運は特に若い頭脳をもつ青年学徒に課せられているのである。そして
(編集部注)

この原稿は、山本先生が昭和44年1月22日に学生を対象とした最終講義に加筆していただいたものである。

会長交代にあたって

会長就任に際して

石川平七

このたび計らずも当応用化学会の会長の職をけがすことになりました。浅学非才もとよりその任を全うすることができるか否かについて危惧の念をいただくものであります。しかし教室において山本先生が退職された後私が最年長者であることでその職をけがすこととなったものと思います。さて現在学生会員を含め3,100名の会員皆さんと共に教室内外において先生方をはじめ特に直接各委員をご担当になっている方、あるいは評議員、運営委員の方に今後在任中一方ならぬ面倒をおかけする事と思しますので、何分のご支援をお願い申し上げます。

ご承知の如くわが応用化学会は50年の歴史と伝統とを持っており、私学を代表する名誉ある応用化学科を擁し、今後益々その発展が期待されるものと思います。

しかし一方社会の進展も激動する時代でありまして大学騒動をはじめ、多くの社会変動の時期であると思えます。この時に臨んで早稲田応用化学科と共にあるわが応用化学会もまた過去の繁栄にのみ便々としておる訳にもゆかないのではなからうかと思えます。

現実を見つめると共に過去において何をなすべきかを深刻に考えたいと思えます。

科学と科学技術を生み出す源泉の一つでもある理工系の大学が常に中正で正常な姿で進めるように、教職員、校友と共に極左暴力から大学防衛に協力して戴きたい。これが母校に対する私の最後のお願である。

最後に愚鈍、怠惰で母校のための熱意だけで、禄にお役にも立たず独善的で勝手なことばかり多く、ご迷惑をおかけした私を許し、教え導いて下さった先輩の諸先生を初め、敬愛する同僚の諸兄、よく我慢して協力して下さい後輩の皆様方に永い間お世話になったことをここに改めて、心から感謝し、母校の発展を祈りながら私のお別れの言葉と致します。(完)

(昭44.1.22)

(旧2回卒、早稲田大学名誉教授・元本会々長)

わが応用化学会は会員相互の親睦、相互の学問技術の啓発が主なる目的であります。兼て早稲田応用化学科教室を後援することが目的となっていると記憶しています。このためには先ず会員相互の接触が何よりも肝要であると確信する次第です。すでに3,000名以上の会員を擁した立派な学会の形を持って居ります。従って年1~2回位の機関雑誌の発刊を是非実行したいものです。また現在発刊中の応化だより、あるいは例会も年3回位は開きたいと思えます。

しかしこれは現在の予算規模80万円では足りないと思えます。少なくとも年間100万円以上の予算が必要かと思われれます。この際会員諸賢においては、出費多端とは思いますが、会費の納入を円滑にして戴きたいものと深くお願い申し上げます。

ちなみに現在わが応用化学科は定員毎年140名でありまして工業化学と化学工学との2分科に編成されています。また大学院研究科は毎年60名にも垂々とする盛況であります。従って将来更に1,000名あるいは2,000名の会員の増員は容易となる見透しであります。教室の先生方も寧日なき忙しきで研究教育に没頭努力して居られます。わが応用化学会の発展は期して待つものがあると思えます。

聊か就任に当り御挨拶を申し上げますと共に不変の御援助をお願いして擱筆する次第であります。

前会長挨拶

水野敏行

今度、会長に石川先生が選出され、バトンを渡すことになりました。

私が、会長就任の懇請があった際、若い方をお願い致したく考えておりましたが、周囲の状況から引受けることになり、一期だけお受けする気持でおりました。然し、その間、応用化学科の創立50周年記念祝典等があり、今日迄在任することになりました。

就任当時、応用化学会を盛にし、同会に対する会員の認識を深めるため、事業を計画し、50周年記念事業

に具体的なものを実現致したく考えておりましたが、その当時、理工学部で基金募集の時を同じくしていたので、重ねて応用化学会の事業基金の募集は困難ということで一般応募は中止したのであります。

然し、応用化学会も、3,000人を越す会員となり、各方面で重要な地位で活躍せられている現状からみて、応用化学会の経費予算が年85万円では、事業らしい事業も出来ないの、今後会員諸氏の物心両面に亘る絶大な御支援を頂き、スケールの大きな応用化学会にし、会員相互の親睦を計り、益々盛大になる様、新会長にもお願いします。(旧2回卒)

◇昭和44・45年度新役員並びに評議員◇

会長	石川平七	
副会長	篠原功	棚橋幹一
監事	牧親彦	
会計委員	鈴木晴男	
編集委員	土田英俊	
庶務委員	平田彰	
運営委員	大坪義雄	長谷川肇
	宇佐美昭次	百武寛
	大友恒夫	安倍通夫
	中曾根莊三	百目鬼清
	木邑隆保	

評議員

旧1	山沢松男	2	稲田勇太郎	3	色川御胤
	桑原光雄	4	小川政得	5	坂田誠
	芳賀惣治	6	鳥井敬文	7	荒木一郎
	海野景正	8	高木暢太郎	9	牧親彦
	宮本五郎	10	神原周		石川平七
11	栗田茂晴		照井総治	12	青山固
	大坪義雄		若山一彦	13	平野静夫
	田上信		村井資長	14	青木恂次郎
	横山鹿之亮	15	正住弘		堀米耕平
	吉田忠	16	豊田善雄		松島喬
17	伊藤孝		棚橋幹一		百武寛
18	飯島義郎		設楽正雄		篠原功
19	大友恒夫		尾立維恒	20	井上勇
	安倍通夫	21	岩崎馨		稲葉康夫
22	関根吉郎		細田喜六郎	23	大隅栄一
	種村哲哉	24	石井欣二		荻原阿爾多
	森田義郎	25	太田昭		福田喜男
	城塚正	26	清水常一		高嶋幹

27	田中甫		中曾根莊三		鈴木晴男
	宮崎智雄	28	宇津木淑夫		大原定夫
29	片岡甲子夫		高橋栄三	30	安達安己
	岡本重晴	31	伊藤政勝		有田士郎
32	上田忠雄		小林謀三		燃料1加藤忠蔵
	長谷川肇		保正秀雄	2	小田五郎
	倉林正弘		藤井修治	3	小野裕二郎
	吉田茂治	4	北沢清		高宮信夫
5	浦上良文	6	赤林宏	7	大鹿隆男
	山田寅之助		工経小管喜一		野村堯
	村松林太郎		板倉宗男		岩城謙太郎
	犬塚克巳		守塚久夫		石館達二
	飯島貞一		横溝克巳		池田稔
新1	百目鬼清	2	東野博樹		田中守
	本田尚士	3	木巴隆保		佐藤匡
4	堀内志郎		三田貞義	5	田中照浩
	宇佐美昭次	6	田和恭介		宮本隆雄
7	豊倉賢		中川文博	8	柳沢亘
	平田彰	9	名手孝文		岡田豊
10	茅原伸光		湯上進	11	松山喜昭
	内藤政敏	12	池田晴彦		井上成文
13	岸本孝夫		芥藤栄輔	14	石上尚希
	萬肇	15	小林昭雄		酒井清孝
16	岡田一利		池野国男	17	小川太一郎
	本間意富	18	小久保忠嘉		荒井栄三
19	後藤栄三		川上重信		大学院土田英俊
	道口正雄				

名誉会員

富井六造	武富昇	肝付兼英
水野敏行	山本研一	

ニ ュ ー ス

◇ 山本先生御退任、名誉教授に ◇

大正12年本学応用化学科を御卒業後、引続き本学に於て研究と教育に御尽力下さった山本研一先生は、昭和44年3月31日をもって教授を退任せられました。

先生は、応用化学科、今日の発展の礎をつくられるとともに、応用化学科のみならず戦後の困難な時期に理工学部再建にあたられ、我が理工学部を確固不動たるものにされたことは周知のとおりであります。御退任後も研究と教育に一方ならぬ熱意を抱かれています。先生は、これからも時々顔をお見せ下さるとのことです。なお、先生の御功績に対してこの度大学から名誉教授の称号が贈られ、また、本会の名誉会員に推戴することに決まりましたことをお知らせ致します。

応用化学会として、今後の御活躍と益々御健祥に亘られるよう、お祈り申し上げます。

◇ 化学科新設の動き ◇

一昨年、応用化学科設立50周年記念を迎えたことは会員の御記憶に新しいことと存じます。その頃からの懸案となっておりましたが、新しい時代の要求に即応して化学科を新設しようとの計画は、最近その動きが目立って来ております。

すでに一般教育担当として基礎化学の方に東健一教授はじめ理学系専攻教員も揃い、加えて関根、高宮両教授も活躍しておられるので、これを母体とし発足したい意向のようです。

この6月から化学科設立委員会が設けられ、大坪義雄教授が委員長となって推進されることになりました。我が理工学部にも化学工学科が分離し、化学科が設立されますと応用化学科を含め夫々独立の立場で化学系各学科が協調し乍ら大いに発展することが期待されるものと思われます。

◇ 明春卒業予定者の就職状況 ◇

この数年間産業界の順調な発展に支えられてか、毎年就職状況は極めて好調で求人数が卒業予定者数よりも遙かに上廻る様子が続いております。今年は各社とも求人の出足が殊のほか早く、5月には全部出揃って大部分の学生が希望する企業に就職内定しております。

明春学部卒業者の動向の特徴は、かなりの多人数(凡そ67名、全卒業予定者の52%)が大学院への進学

を希望していることで、理工学部では大学院大学への方向に動きつつあるものと思われます。

昭和44年度 大学院・学部就職状況 (昭和45年3月卒業予定者)

		人 数
大 学 院	修士2年在籍者数	34名
	就職希望者(29名)	内定 27名 未定 2名
	博士課程進学希望者	3名
	外国人	2名
学 部	45年3月卒業予定者	128名
	早大大学院進学希望者	48名
	一次推薦入学決定者	13名
	受験希望者	6名
	他大学大学院進学希望者	6名
	就職希望者(57名)	内定 54名 未定 3名
	自 営	3名
	未 定	1名

(昭和44年6月23日現在)

◇ 応用化学科研究室近況 ◇

昭和44年4月現在における応用化学科の構成は下表の通りです。大学院生が増加の傾向にあり研究室の推進力になって来ている様子がおわかり頂けると存じます。

	担当教授	修士課程		博士課程			45年4月推せん入学予定者		
		1	2	計	1	2		3	計
無機化学研究	教授 大坪 義雄 教授 加藤 忠蔵	6	4	10			1	1	3
高分子化学研究	教授 篠原 功 助教授 土田 英俊	4	6	10			1	1	8
燃料化学研究	教授 森田 義郎	5	2	7	1		1		4
発酵及び食料化学研究	教授 鈴木 晴男 助教授 宇佐美昭次	6	4	10					3
応用電気化学研究	教授 吉田 忠	4	5	9					2
化学工学研究	教授 石川 平七 教授 城塚 正彰 助教授 平田 豊倉 専任講師 豊倉 賢	10	10	20	3	1	1	5	14
有機合成化学研究	教授 村井 資長 教授 藤井 修治 教授 長谷川 肇 助教授 佐藤 匡	12	3	15			1	1	10
物理化学研究	教授 東 健一 助教授 宮崎 智雄	5		5					5
(計)		52	34	86	3	2	4	9	49

◇ 応用化学会々員動向 ◇

昭和44年4月の新入学者を迎えて、更に会員が増加しました。一層活発な活動を期待したいと思います。

応用化学会会員数

	人 数
正 会 員	2,454
学 生 会 員	643
名 誉 会 員	3
有 志 会 員	14
計	3,114

(昭和44年5月24日現在)

◇ 理工学部学生スト ◇

早稲田大学も御多分に漏れず最近のスチューデントパワーとやら謂う運動が活発になっております。理工学部でも6月17日より大学立法粉碎をさげんで3日間のストライキが行なわれ、その後も混沌としている実情です。一日も早く着いた雰囲気の中で研究できる環境にしたいものと会員の皆様と共に考えております。

会 務 報 告

◇ 山本先生退任記念会 ◇

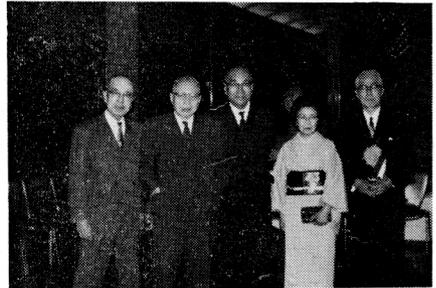
本年3月31日をもって退任されました山本研一教授の46年の長きにわたる御功労、また多大の御薫陶に対しいささかなりとも感謝の意を表し、併せて研究上の御活躍をたたえるために、先生に記念品を贈呈申し上げることを企画致しましたところ、多数の皆様方の御賛同をえまして所期の目的を達することができました。



山本先生御家族近影

中央は先生、令夫人、御令息（山本明夫氏東京工業大学助教授）椿山荘送別会での歓談

た。5月26日の昭和44年常会席上にて、前会長水野氏より先生に、記念品を贈呈致して頂きました。御賛同頂きました各位に、改めてお礼申し上げます。



写真右より山本先生御夫妻、水野敏行氏（前会長）、中沢克巳氏（旧2回卒）、稲田勇太郎氏（旧2回卒）の各先輩

◇ 庶 務 ◇

1. 昭和44年3月25日 卒業式
卒業生143名、内大学院進学者47名、就職者96名、小林賞は後藤栄三君と川上重信君、古河三水賞は足立哲夫君に夫々授与された。
2. 3月25日 送別会
椿山荘に於て、卒業式終了後、謝恩会と合同で行なわれた。なお、卒業生より金7万円也が贈られた。紙上をかりて厚くお礼申し上げます。
3. 5月26日 役員会及び春季常会
 - a) 本年度は役員改選期にあたります。今期会長として、石川平七教授(昭和5年第10回卒)、監事として牧親彦氏(昭和4年第9回卒)が選ばれました。なお新役員は別紙通りです。
 - b) 昭和43年度会務報告、昭和44年度収支予算及び関西支部費増額の件が承認された。
 - c) 本会名誉会員として、水野敏行氏、山本研一先生が推薦された。
 - d) 常会の席上、山本研一先生への記念品贈呈がおこなわれた。

◇ 昭和44年度常会出席者名 ◇

教 員	東 建一
旧1～5	稲田勇太郎、肝付 兼英、水野 敏行、山本 研一、色川 御胤、坂田 誠、芳賀 惣治、鳥井 淳次、上野 至
6～10	荒木 一郎、伊藤 誠一、秋山 桂一、宮本 五郎、牧 新彦、福島信之助、石川 平七、堀越 武雄
11～15	後藤 勝三、田上 信、村井 資長

畑山 三郎, 大坪 義雄, 正住 弘,
 宇野沢順平, 平野 静夫, 吉田 忠
 16~20 棚橋 幹一, 河合謹三朗, 春日井佐太郎
 小阪直太郎, 井上 勇, 安倍 通夫,
 篠原 功
 21~25 岩崎 馨, 兼松 貞雄, 森田 義郎,
 佐藤 達朗, 阿久津兼二
 26~32 柏木 希介 中曾根莊三, 鈴木 晴男
 燃1~7 赤林 広, 長谷川 肇
 新1~5 松尾 昭二, 辻 正和, 東野 博樹,
 菊地 透, 田中 照浩, 宇佐美昭次,
 島根 正彦
 6~10 茅原 伸光, 平田 彰
 11~18 高桑 昌平, 浜野 雅一
 大 修 土田 英俊, 吉富 末彦, 横井 健次
 以上55名

◇昭和44年2月17日以降本所変更および訂正◇

*印 訂正, △印 町名変更

卒業 年数	氏 名	新 住 所
旧3	上野 至	世田谷区羽根木2の16の6
15	堀米 耕平	杉並区下高井戸1の300「桜上水 マンション403」
16	磯野 好治 内海 碩夫	茨城県勝田市中根深谷津866 世田谷区野沢2の7「野沢ハイム 212号」
17	△進藤 喜信	杉並区久我山5の27の3
20	木下 賤雄	港区南青山5の11の23
20	△浜野 裕	中野区中央3の35の3
21	岩崎 馨 竹内 孝 *小坂直太郎	世田谷区烏山町1014 新宿区若松町77の16
23	猪熊 敏夫	藤沢市鶴沼桜が岡1の17の22
24	鈴木 亮一	名古屋市千種区猪高町高針大廻間 4の649「住友高針荘A-I2」
25	内富 実 林 章	京都市左京区下鴨中川原町58の5
26	清水 常一	都下保谷市富士町4の5の16「相 田方」
29	飯田 寿禅	
29	伏見 利郎 松井 孝 嶋中 卓見	中野区中央3丁目22-5号 練馬区春日町2の12の34
燃3	市瀬 一雄	中野区江古田1の38の2
△小田	五郎	目黒区東山2の20R Q42「3の20

の2」
 河村 正澄
 *西村 一郎
 5 田島 一郎 渋谷区代々木4の23の16「秀和参
 宮橋レジデンス806」
 工1 藤井 達夫 杉並区下井草1の9の14
 5 野口 音光 世田谷区成城町22の4
 7 東兵 義男 新宿区余丁町94
 大修2 古谷峻太郎 仙台市原町小田原新堤下27の93
 13 佐藤 興 大分市西明野2の2「昭電社宅8
 の304」
 新2 見沢 辰男 千葉県市川市中山3の45「日本重
 化学工業中山アパート326」
 6 原田 嘉夫 福岡市多賀1の17の7
 7 松田誠一郎 埼玉県川越市的場2808の76「東急
 団地23の1」
 8 *田中 達也 横浜市戸塚区戸塚町3755の1「台
 糖戸塚アパート2の101」
 8 及川 栄蔵 大阪市東淀川区三津屋南通1の62
 「古西方」
 四本 杉 世田谷区桜上水5の34の5
 9 川本 昭夫 杉並区高井戸西3丁目14番9号
 松崎 久 北区豊島2の26の20「日向アパー
 ト」
 吉村 晃一 川崎市今井西町179
 門田 正彦 千葉県柏市常盤台216「日東電工常
 盤台社宅」
 新9 和田 瑞穂 川崎市木月伊勢町2300「丸善石油
 川崎社宅27号」
 藤崎 俊男 東海愛極アパート2の11
 10 黒木 齐 横浜市戸塚区長沼667
 保坂 弘毅 和歌山県田市初島町浜1677-8「東
 燃楚都浜アパート845号」
 堤 恭男 横浜市磯子区杉田町1368「日石ア
 パート4の6」
 戸谷 義雄 藤沢市藤沢6019の63
 11 松尾 英一 2の24の17
 牧野 康伸 川崎市東古市場62「日石化学社宅
 A-5」
 村上 昭彦 小金井市中町2の24の16
 水瀬 秀章 杉並区荻窪2の153「江口方」
 12 松木 隆郎 千葉県幸町1番地「住宅公園8の
 5の403号」
 13 △安藤 吉弥 葛飾区立石4の30の6
 小松 一郎 武蔵野市吉祥寺南町3の42「三菱

- 金属アパート3203」
- 駒田 康隆 中野区中央5の47の7
佐野 正道 名古屋市東区聖代官町17「ミツバ
ヤビル内」
- 杉崎 昌和 横浜市保土ヶ谷区岩井町76
高橋 欽一郎 横浜市磯子区磯子町字紅取1259
中谷 一泰 杉並区久我山1の33
籾野 嘉彦 横浜市保土ヶ谷区川島町1997「左
近山団地2の15の5022」
- 平田 修 山口県岩国市昭和町3の9の1の
203
- 福田 暉夫 世田谷区下馬5の7の16
南 和男 横浜市磯子区磯子町字腰越422の9
「日石化学社宅A-40」
- 武笠 英彦 世田谷区上用賀6の18の8
山口 達明 千葉市稲毛海岸3の21の404
湯沢 恩 渋谷区東1の14の3
日田正次郎 浦和市東仲町11の21
- 14 後沢 忠夫 神奈川県平塚市田村3824-17-202
棚井 暁男 群馬県渋川市阿久津273の2「関東
電化アパート206」
- 15 片岡 邦彦 北区神谷2の3の4「志芳荘16号」
更級 至 千葉県市原市有秋台東2の2「日
産アパート121号」
- 長谷川 徹 広島市富士見町4の30
杉本 剛 横浜市保土ヶ谷区南希望ヶ丘20
比留間哲生 川崎市東古市場22「日石化学東古
市場寮」
- 矢部 俊夫 都下田無市谷戸町2の7の16「三
井東圧親和寮内」
- 16 △市居 良治 杉並区高井戸西1の5の32「あづ
ま荘」
- 岡田 一利 川崎市東古市場22「日石化学東古
市場寮」
- 宮島 猛男 船橋市高根町3218の1
17 神山 紘明 横浜市保土ヶ谷中希望ヶ丘174
木曾 宗昭 千葉県船橋市本中山3-22-5
「松栄荘内」
- 三島 邦男 名古屋市南区四条町1の64「東レ
熱田寮」
- 18 荒井 栄三 川崎市東古市場22「日石化学東古
市場寮」
- 片桐 清 千葉市幕張町6-285「松本方」

住所変更者(追加)

旧21 川端郁太郎 上尾市上尾1070の1

- 24 鹿島 譲治 川口市仲町1の167
32 朝倉 光雄 岩城市小名浜字渚91「日本化成株
式会社石城事業所」
- 今井 昇 横浜市南区六川2の26の12
坪田 裕造 高岡市木津474「中越印刷製紙KK
木津工場」
- 燃2 小田 五郎 太田区南久我原2丁目8の20「久
我原ハイムS-2015」
- 大3 宇佐美盛爾 文京区小日向2丁目6の7
新6 岡田 由雄 名古屋市中村区笹島町1の221「豊
田ビル名古屋営業所」
- 谷津 昇一 横浜市保土ヶ谷区左近山団地2の
2の404
- 新8 浦田 雅夫 四日市市緑ヶ丘町「昭和石油KK
社宅Cの1406」
- 新9 相川 直昭 小平市上水南町540

学生会員

- | 学年 | 氏名 | 新住所 |
|----|-------|-------------------------|
| 1年 | 首藤 俊介 | 中野区上高田1の36の26「山部方」 |
| | 池田 勝 | 秋田県鹿角郡尾去沢町尾去上山
201 |
| | 石川 広 | 千葉県船橋市習志野台1の819の8 |
| | 内田 勝雄 | 新宿区東大久保2の16「小塚方」 |
| | 倉都 祥行 | 渋谷区代々木4の11「斉藤方」 |
| | 鈴木 正 | 杉並区井草5の6の8「土橋ハウス」 |
| | 鈴木 正通 | 江戸川区南小岩7の3の6 |
| | 中井善次郎 | 千葉県佐倉町新町38 |
| | 内藤 清吉 | 神奈川県中郡二宮町山西539 |
| | 中山 典昭 | 渋谷区本町4の45の2 |
| 2年 | 岩沢 晃 | 鎌倉市極楽寺3の11の28 |
| | 建石 敏光 | 神奈川県茅ヶ崎市中海岸2の2の
41 |
| | 高梨 茂敏 | 板橋区志村2の23 |
| | 堀江 芳文 | 都下調布市菊野台3の6の3 |
| 3年 | 田沼 逸夫 | 埼玉県入間郡富士見町字鶴間3654
の1 |

海外よりの留学生

- 新制大学院修了者(博士課程) P42
- 張 文 雄 昭和43年 大13を参照
第13回卒業生(昭和40年3月) P45~46
- 戴 宏 宗 台湾, 台南市友愛街8号
張 文 雄(台湾大学) 台湾, 台北市新生北路2段41
巷17号
第14回卒業生(昭和41年3月) P46

- 蘭 敏 政(安宅産業台北支店) 台湾, 台北市信陽街
28号
- 劉 富 雄 Faculty of Engineering Science Uni-
versity of Western Ontario London,
Ontario, Canada
第15回卒業生(昭和42年3月) P47
- 林 文 雄(東食台北支店) 台湾, 台北市中山北路一
段53巷18号
第16回卒業生(昭和43年3月) P48
- 鄭 懋 楷(台湾塑膠公司) 台湾, 彰化県員林鎮中山
路26号
第12回卒業生(昭和39年3月) P
- 王 柏 榮(吉本塑膠公司) 台湾, 台中市中正路80号
- 吳 嘉 榮(中国石油公司) 台湾, 台北県中和郷竹林
路18巷8号
(頁は応化会員名簿の頁数です。)

会 員 計 報 (7号以後)

旧 2	広 瀬 玄 親	43年12月逝去
旧 2	原 達 一	44年4月逝去
工 8	横 山 寿 勝	43年12月逝去
新 16	早 水 宏	44年6月逝去

謹しんで哀悼の意を表します

◇事務担当者からのお願い◇

前号に消息不明の方々を掲載致しましたところ、大勢の方々からお知らせをいただきました。厚く御礼申し上げます。尚下記の方々は現在なお不明ですのお判りの方がいましたらお知らせ下さいませようお願い致します。また新名簿発行後、記載事項の変更はこの紙上に掲載致しますので変更がありましたときは必ずお知らせ下さい。

◇消息不明者◇

- 旧制3回 遠藤多喜雄, 岡崎 金造, 豊田 重臣
- 4回 河辺 健, 渡辺 秀
- 5回 石塚 諄, 川津 興仁, 工藤 義郎,
藤本 資雄
- 7回 井上 清, 花村 重久, 増淵 吉長,
村上義比古, 岡本 忠夫
- 8回 有竹 四郎
- 9回 御厨 国男
- 10回 富樫 稔, 野田 秀雄, 平田 薫,
松本 堯司

- 11回 石田 兼吉, 神津 東吾, 西村 経大,
参成 辰雄, 三村倫次郎(旧姓菊楽)
- 12回 長行司晴味
- 13回 佐久間一彦
- 14回 佐々木 浩, 島田 国郎
- 17回 今村 竹利, 上条長一郎
- 21回 川端郁太郎
- 22回 平 正隆
- 23回 稲垣 武彦, 桑野 善夫, 佐藤 忠夫,
崎尾 要, 樋口 健二
- 24回 吉田 忍, 吉田 元徳, 鹿島 譲治
- 25回 天野 弘昭, 井上 理基, 中村 四郎,
原田 鵬一, 林 章(旧姓安田),
前田 洋
- 26回 岩田繁太郎, 島森有礼美
- 27回 田島 一徳
- 28回 唐住 理照, 葛山 秋二, 橋本彦太郎,
増井 譲, 村瀬 武男
- 29回 鈴木 和友
- 31回 河島 礼二
- 32回 鎌倉 潔, 今井 界, 朝倉 光雄,
坪田 裕造, 伊藤 陽一
- 燃 3回 青木 良市, 岡本 弘, 矢沢 志郎
- 5回 池田 秀雄, 伊藤 秀雄
- 6回 長沢 寛一, 安藤 成一, 岸田 耕
- 7回 袴塚 卓雄, 定田 定治, 萩原 昭二,
池田 芳夫
- 20回 小田 五郎
- 工経7回 佐藤 憲雄, 高橋 勤, 仁賀保成行,
林 清士郎
- 9回 富永 孝, 福田 健二
- 12回 寺尾 隆, 岩田 明, 長尾 鉄中
- 13回 小田切 護
- 15回 毛利 隆一
- 大学院 宇佐美盛爾
- 新制1回 大逸 静夫, 小林 昭夫, 佐藤 幹雄,
西岡 芳生, 葉山 昇, 吉川 忠
- 2回 林 達也, 渡辺敏雄
- 3回 小泉 彰, 大村 修三, 山本 智也
- 4回 熊木 三郎, 田口 直広
- 6回 岡田 由雄, 谷津 昇
- 7回 三宅 正志
- 8回 石坂 竜夫
- 9回 山本 晃司, 佐藤 久, 井上 千敬
(旧名一弘), 相川 直昭, 中村 良英

- 10回 宮寺 健
- 11回 柴田 隆治, 滝沢 諠
- 12回 斉尾 健吉
- 13回 小坂田国雄, 太田 政幸
- 16回 西川 義弘
- 17回 石井 利典, 井上 昭夫

◇会計報告◇

貸借対照表

(昭和44年3月31日)

借 方		貸 方	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
現 金	372	前納会費積立金	908,500
郵便振替	87,642	(正有志会費 688,900)	
普通預金	98,653	(学生会費 219,600)	
郵便貯金	705,084	名簿刊行積立金	500,000
定期預金	2,000,000	基 金	1,367,000
		次期繰越金	116,251
	2,891,751		2,891,751

収支決算表

(自昭和43年4月1日
至昭和44年3月31日)

取 入		支 出	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
前期繰越金	79,624	会 報 費	190,395
正会員会費	723,400	名 簿 費	772,925
有志会員会費	5,700	集 会 費	39,121
学生会員会費	184,800	学 生 部 会 費	90,000
諸 利 息	123,655	集 金 部 費	43,068
名簿代	246,900	支 部 費	10,000
名簿刊行積立金	0	用 品 費	8,885
		事 務 費	89,000
		雑 費	4,134
		次期繰越金	116,251
	1,363,779		1,363,779
	1,394,624		1,394,624

昭和44年度予算表

取 入		支 出	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
前期繰越金	116,251	会 報 費	250,000
正有志会員会費	500,000	集 会 費	120,000
学生会員会費	160,000	学 生 部 会 費	120,000
諸 利 息	100,000	集 金 部 費	40,000
		支 部 費	20,000
		用 品 費	20,000
		事 務 費	100,000
		雑 費	10,000
		予 備 費	196,251
	876,251		876,251

小林奨学基金利息収支決算表

(自昭和43年4月1日
至昭和44年3月31日)

取 入		支 出	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
前期繰越金	168,619	教員研究費(1名)	100,000
貸付信託(10口)収益金	155,574	第15回小林賞(2名)	30,650
普通預金利息	3,287	雑 費	810
		次期繰越金	196,020
	327,480		327,480

基金総額 214万円(10口) 使用済利息 教員研究費 98万円
小林賞 22.5万円 別口(水野会長) 100万円+利息 363,537円
(内 210,125円を50周年事業に使用済)

以上の通り昭和43年度の会計報告を申し上げます。
この内容は昭和44年5月26日監査を終了し、同日の役員会で承認されました(鈴木)。

◇運営委員会開催◇

新委員による第1回運営委員会が7月中旬頃に開かれる予定です(平田)。

◇編集後記◇

役員改選の時期に当り、発行が少々遅れましたことをお詫び申し上げます。改選に伴い、これに関連した報告が多くなりました。

山本研一先生の最終講義を載せて頂くよう御願いましたところ、御快諾頂けましたので、全文を御伝えできるようになりました。

毎号に載せておりました研究室紹介は今回は頁数の都合で割愛しました。次号では有機合成化学系研究室及び有機及び硫酸塩工業研究室を取上げる予定であります。

この応化だより第8号から編集人が宇佐美さんから土田に交代させて頂きました。充分のこともできませんが、編集補佐役入江伸一君(応化4年)と一緒に、会員の皆様方の御意見を入れながら任期中努力させて頂きたいと思います。何卒御支援の程御願致します。(土田記)

昭和44年6月30日 発行

編集兼 土 田 英 俊
発行人

印 刷 株式会社 早稲田大学印刷所